

「しまね映画塾」という
取り組み

新連載

西南、
南西、
テレビ風ゆう き とよ ひろ
結城豊弘

(読売テレビチーフプロデューサー)

駒澤大学法学部卒。1986年アナウンサーで入社。その後「ウェークアップ! ぶらぶら」「情報ライブ ミヤネ屋」の取材・制作を手掛け、現在は「そこまで言って委員会NP」担当。著書に、「地方創生の真実」(幸坊治郎氏らと共著、中央公論新社)、「いまの東京一極集中に疑問をもち発信。尾崎行雄記念財団評議員。

未経験者による映画づくり

台風一六号の影響か雨脚が強くなった。レンズを通して雨粒が確認出来る。「よーい。スタート」。僕はこの日、島根県雲南市にいた。出雲縁結び空港から車で三十五分。人口四万人余り。雲南市は島根県の東部に位置し出雲神話の「ヤマタノオロチ伝説」の伝承地が数多く残る。その市全域を舞台に三日間行なわれた「しまね映画塾2016」。僕は友人の映画監督・錦織良成の熱心な説明がきっかけで参加を決めたのだ。

この映画塾の説明を少ししたい。二〇〇三年からスタート、島根県の各地で開催され今年で十四回目。母体のしまね映画祭の関連イベントで映画『RAILWAYS 49歳で電車の運転士になった男の物語』や「第四〇回モントリオール世界映画祭」最優秀芸術賞を受賞した最新作『ただ

ら待』でも注目の島根県出身の錦織監督が塾長となり、島根県民会館と開催自治体のサポート、ボランティアの連携プレーで続けられてきた。

ここまで読んで「なんだ映画オタクの集まりか」と思われるかもしれない。僕は最初そう思った。しかし実際は、高校教師や会社員、主婦、高校生などまったく経験のない人達の映画づくりなのだ。シナリオを公募し、その中から選ばれた作品に基づいて監督や役者、スタッフを決め三日間合宿。プロ仕様のカメラで撮影し、その後『桐島、部活やめるってよ』で日本アカデミー賞最優秀編集賞受賞の日下部元孝が自ら撮影テープを編集し、五分程度の短編作品を仕上げ上映するというなんとも贅沢な映画のワークシヨップなのだ。

いまでは「次はうちの町で開催してほしい」とリクエスト殺到。開催は順番待ちだという。

「いっぺん参加して」

今年の応募脚本は五六作品。塾生や事務局で一〇作品に絞り込んだ。参加塾生七九人。役者、撮影スタッフ等の役割が割り振られる。最年長は八十六歳、最年少七歳。映画が好きで来た人もいれば、友達づくりが目的の人もいる。東京や福岡など地元以外からの参加も目立つ。

山深い斐伊川本流上流にある尾原ダム横の支援センターを基地に雲南市全域に一班六人〜八人の一〇のチームが広がり撮影。映画テーマはこの地に伝承の出雲神楽を題材にした映画や時代劇、青春映画、介護や高齢化、地域産業など多岐にわたった。

僕の参加した班の映画は地元で伝わる製鉄技術「たたら吹き」と結婚を絡めたストーリー。メンバーは僕を最年長に東京から来た二十代女性や地元四十代サラリーマン、中学

二年生の男の子など。監督は介護現場で働く四十代男性。僕はカメラマンとして一期一会の仲間と悪戦苦闘。吉田町の美しい白壁土蔵群を舞台に撮影した。

市の職員が各班に付き安全確認や道路許可などのサポートを行なう。ボランティアの数は二〇〇人以上。撮影に必要な民家を借りたりエキストラを頼んだり一緒に汗を流した。全班無事に撮影終了。われわれも小さなトラブルは山ほどあったが予定十分前にクランクアップ。解散式では各班の報告が行なわれた。

「去年は結局勇気がなく不参加。今年に参加し素晴らしい仲間ができた」と女子大生が涙の挨拶。「子供は自己表現が下手で内にこもりがち。参加した息子を見て親として自信が持てた」と涙で感謝を述べる父と高校生。涙と笑顔が混じったなんともいえない心地よい達成感が会場を包

んだ。錦織監督がこう結んだ。「みんなで作る作品を作る。答えもスタイルも無い。映画は人が変われば百通りの撮り方がある。映画を通して皆さんがこの雲南の素晴らしさ、人の力を感じてくれればいい。この島根こそ日本の最先端があるんだ」と。

地方創生が叫ばれ、さまざま取組みが全国で行なわれている。しかし、紙に書いたお題目や代理店が企画したキャッチフレーズだけの取組みも目に付く。十四年も続く島根の映画の取組み。もしかしたらこんな取組みこそが、本当に日本を元気に出来る取組みなのではないか。

テレビ番組を制作してきたプロのはずの僕だが、気がついたら参加者の熱につられ、同じ目線で真剣に議論していた。錦織監督の「いっぺん参加して」。その言葉の意味がやっと理解できた。